

〈修士論文要旨〉

## 空間構造論から捉えた中近世移行期の鉱山遺跡

—— 金銀山集落の類型と変遷把握に向けた試論 ——

平 山 裕 之\*

### I. 問題意識

日本の中近世は、多様で個性的な「集落（都市・町・村落）」が展開した時代とされる。近年、中近世考古学の顕著な進展に伴い、「集落遺跡」に対する関心も高揚しており、その調査・研究は学際的に結実することが多くなった。しかしながら、そうした学際的研究の場において、これまで議論の俎上に載ることがほぼ皆無であった集落も存在している。その典型例に「鉱山集落」を挙げられよう。鉱山集落を「都市」と認識する研究<sup>1)</sup>も存在しているが、「遺跡」としての認知度が低く、また開発行為に伴う緊急発掘の対象になることも稀で、考古学的にはその評価が判然としていない。

本論文はこうした現状を鑑み、鉱山集落は「都市遺跡」との認識が可能か否かを念頭に置くものとする。そして集落の実相について考古学的な検討を行うが、特に「中近世移行期」における金銀山集落の再評価を目的としている。

### II. 論文構成

はじめに

第I章 先行研究の把握

第II章 研究方法論

第III章 鉱山集落の復元的把握

第IV章 鉱山集落の空間構造と特質

第V章 鉱山集落の空間変遷と都市史的地位

おわりに

本論文は全V章から成っている。ここでは各章の内容を簡潔に説明して行きたい。まず「はじめに」で鉱山集落研究の必要性を説くと共に、「都市遺跡」及び「空間構造」の観点から検討することを論じた。これを受けて「第I章」では、従前の「都市空間研究」を3期に分けて整理し、また文献史学・歴史地理学・考古学による「鉱山集落研究」の動向を概観した。そして両研究史を踏まえた本論文の課題は、中近世移行期における「変遷（発展・発達のプロセス）」把握を前提と

平成19年度 \*文学研究科文化財史科学専攻

し、「都市」とも評される鉱山集落を「空間構造」から捉え直すことに設定している。そこで「第Ⅱ章」では、こうした課題を検討する上で必要になる3つの視角－「空間構造（論）」・「都市考古学<sup>2)</sup>」・「景観変遷史<sup>3)</sup>」－について説明し、これらの視角によって甲斐金山遺跡（黒川・中山金山集落）・石見銀山遺跡（石銀集落）・佐渡金山遺跡（上相川集落）を分析することとした。

本論に入る「第Ⅲ章」では各集落の時代性（最盛期）を確認し、「戦国期鉱山集落（甲斐）」・「戦国～近世初期鉱山集落（石見）」・「近世初期鉱山集落（佐渡）」として、各々の基本構造を復元的に把握した。職住一体のテラス（人工平坦面）を基本に、寺社・墓地などをも内包した「空間構造」は、各鉱山集落に共通する「普遍性」と捉えられる。しかし、各集落には幾つかの相違が存在することも事実で、集落空間を規定した要素「原地形・人工構築物（道）」による形態差、及び「商業・サービス諸機能」の包摂度による機能差などは、特に注意すべきであると考えた。

そこで「第Ⅳ章」では、鉱山集落における時代的な「差異」の明確化を前提に、各集落の空間的特質を検討している。この際、「都市考古学」の視角に基づき、チャイルドによる都市要素<sup>4)</sup>を参考に、①人口の集中 ②商人・サービス業者の定住・専業 ③道の敷設による計画性 ④物資流通・消費様相 ⑤血縁よりも地縁に基づく社会組織 という5項目の「都市性」を設定し、各集落を捉えることにした。特に前章を踏まえ、機能的特質（②）と形態的特質（③）を重視した検討を行っている。この2点に関して整理すれば、原地形が集落空間を規定して計画性を伴わず、商業・サービス諸機能も有さない「戦国期鉱山集落」。同様に、原地形が集落空間を規定するが、部分的な道の敷設による計画性が認められ、近接した場に商業・サービス諸機能が存在する「戦国～近世初期鉱山集落」。そして、道を規準に計画的な集落形成を行い、集落内に商業・サービス諸機能を有する「近世初期鉱山集落」となる。結果として、②と③の時代的な発達過程を確認し、特に上相川集落は「鉱山都市」と言い得る様相を呈していたと判断される。

第Ⅲ・Ⅳ章での検討を踏まえた「第Ⅴ章」では、各鉱山集落にモデルを設定し、「景観変遷史」の視角から発展・発達の過程を跡付け、鉱山集落が「日本都市史」的にどう評価されるのかを試論する。①鉱山（坑場）と集落との分離 ②商業・サービス諸機能の空間的結合 ③集落空間の閉鎖化 という「外面的」変遷と都市性の顕在化という「内面的」変遷から、「山間初源型」・「山間発展型」・「山麓拠点型」の各モデルを設定した。また、史料研究に基づく近世初頭以降の鉱山集落を「山麓拠点編成型」と仮定し、計4段階の発展的な変遷を想定している。しかしながら大局的・単線的な発展・発達の道筋を提示したに過ぎず、現段階でこうした動態を「日本都市史」に位置付けることは極めて困難である。そこで前章にて「鉱山都市」と捉えた「山麓拠点型」鉱山集落の都市史的地位を「境内一町」の空間類型論<sup>5)</sup>で確認すると、「〔境内〕と〔町〕の中間の領域」・「境内でも町でもない領域」<sup>6)</sup>と考えられ、中近世都市史の解明にとって鉱山集落は、極めて重要な地位を占めると結論付けた。

### Ⅲ. 総括

本論文は発掘された中近世移行期の鉾山集落について、その実相を「空間構造」から把握すると共に、「都市遺跡」と捉えることで「日本都市史」への位置付けを志向している。

鉾山集落の変遷を4段階で提示したが、その動態を明快に都市史へ位置付けることは困難と言える。ただし、考古学的に「都市」と認識し得る「山麓拠点型」鉾山集落を「境内-町」の空間類型論で見た場合、両者が複雑に融合した類型と想定され、中近世都市史の解明にとって、重要な都市類型になることが予測された。よって鉾山集落を「都市遺跡」としての観点から、調査・研究・保護する必要性について、強く主張したものである。

### 註

- 1) 川崎 茂 1961「歴史的鉾山町の形態と機能」『地理学評論』第34巻第7号 日本地理学会, pp.14-39  
山口啓二 1959「近世初期秋田藩における鉾山町-院内銀山を中心に-」伊東多三郎編『国民生活史研究』2 (生活と社会経済) 吉川弘文館, pp.189-224
- 2) 前川 要 1991『都市考古学の研究-中世から近世への展開-』柏書房
- 3) 藤岡謙二郎 1955『先史地域及び都市域の研究』柳原書店
- 4) Childe, V.G. 1950 *The Urban Revolution*. *Town Planning Review*, 21, pp.3-17
- 5) 伊藤 毅 1993「境内と町」都市史研究会編『年報 都市史研究』第1巻 (城下町の原景) 山川出版社, pp.23-36
- 6) 伊藤 毅・高橋康夫・仁木 宏 1997「〈対論〉都市史のフロンティア 中世都市をめぐる」『建築雑誌』vol.112 (1406号・特集都市史) 日本建築学会, pp.15-17